

# 文化財と技術

第2号

2002年5月

文化財と技術の研究会

# 目 次

## ≡研究論考≡

### 福島県内出土古墳時代金工遺物の研究

－ 筑内古墳群出土馬具・武器・装身具等、真野古墳群 A 地区 20 号墳出土金銅製双魚佩の研究復元製作－

(復元研究プロジェクトチーム) …………… 1

#### 第一部 復元研究の目指すもの

- 〔1〕復元の企画(森 幸彦) …………… 1
- 〔2〕古代遺物復元研究の未来とその手法(鈴木 勉) …………… 9
- 〔3〕復元研究対象遺物の選定と研究課題(鈴木 勉) …………… 14
- 〔4〕ものづくりの立場から見た復元研究の体制について(押元信幸) …………… 22
- 〔5〕筑内古墳群出土遺物の自然科学的調査  
(菅井裕子・渡辺智恵美・平尾良光・榎本淳子・早川泰弘) …………… 27

#### 第 2 部 復元研究の経過

- 馬具の復元 …………… 36
- 〔6〕筑内 37 号横穴墓出土馬具から復元される馬装について(桃崎祐輔) …………… 36
- 〔7〕古墳時代金属装木製鞍の復元(古谷 毅) …………… 75
- 〔8〕筑内 37 号横穴墓出土雲珠・辻金具の鍛造技術について(山田 琢) …………… 84
- 〔9〕筑内 37 号横穴墓出土杏葉と鏡板について(鋳の製作と組立)(山田 琢) …………… 103
- 〔10〕筑内 37 号横穴墓出土鉄製轡の復元製作(山田 琢) …………… 109
- 〔11〕筑内 37 号横穴墓出土飾帯金具の復元について(伊藤哲恵) …………… 129
- 〔12〕筑内 37 号横穴墓出土杏葉・鏡板の吊金具の復元製作(伊藤哲恵) …………… 135
- 〔13〕筑内 37 号横穴墓出土縮金具の帯金具と帯先金具の復元製作(伊藤哲恵) …………… 137
- 〔14〕筑内 37 号横穴墓出土馬具の鉄地金銅張りの復元工程(依田香桃美) …………… 139
- 【筑内 37 号横穴墓出土馬具金具類・製作工程企画表】(依田香桃美) …………… 167
- 〔15〕筑内 37 号横穴墓出土鞍・縮金具の復元について(高橋正樹) …………… 176
- 〔16〕筑内 37 号横穴墓 木製鞍・鐙の想定復元製作(小西一郎・鈴木 勉) …………… 183
- 〔17〕出土しない敷物、紐、革製品を復元する(押元信幸) …………… 200
- 〔18〕筑内 37 号横穴墓出土馬具／復元馬具の調整・組立について(押元信幸) …………… 205
- 〔19〕筑内 37 号横穴墓出土馬具の調整・組立について(山田 琢) …………… 209
- 大刀の復元 …………… 216
- 〔20〕筑内 6 号・26 号横穴墓出土大刀の構造と復元案(菊地芳朗) …………… 216
- 〔21〕筑内 6 号横穴墓出土大刀の鉄地銀被せの技術について(押元信幸) …………… 223
- 〔22〕筑内 26 号横穴墓出土大刀の復元経過について(押元信幸) …………… 227
- 〔23〕筑内 6 号横穴墓出土大刀鞘と柄の製作(小西一郎) …………… 233
- 〔24〕筑内 6 号横穴墓出土大刀の柄の紐巻きについて(五味 聖) …………… 235

刀子の復元	236
〔25〕 筑内21号横穴墓出土刀子と装具の復元について (清喜裕二)	236
〔26〕 筑内21号横穴墓出土刀子の鞘・柄の製作工程 (五味 聖)	241
矢の復元	243
〔27〕 筑内 6 号横穴墓出土矢の復元について (清喜裕二)	243
〔28〕 筑内 6 号横穴墓出土鉄鏃と矢の製作技術 (山田 琢)	246
耳環の復元	257
〔29〕 筑内古墳群出土銅芯銀箔張り鍍金耳環復元製作実験 (高橋正樹)	257
銅鏡の復元	262
〔30〕 筑内37号横穴墓出土銅鏡の復元について (押元信幸)	262
〔31〕 筑内37号横穴墓出土銅鏡の鑄造復元工程 (長谷川克義)	264
金銅製双魚佩の復元	266
〔32〕 真野古墳群 A 地区20号墳出土金銅製双魚佩 (甲) の復元製作 (松林正徳)	266
〔33〕 真野古墳群 A 地区20号墳出土金銅製双魚佩 (乙) の復元製作 (黒川 浩 鈴木 勉)	279
〔34〕 真野古墳群 A 地区20号墳出土金銅製双魚佩のワッシャーと目玉を復元する (依田香桃美)	282
〔35〕 真野古墳群 A 地区20号墳出土金銅製双魚佩の鉾と組立について (山田 琢)	292
第 3 部 復元研究から何が見えるか	
〔36〕 鉄地金銅張り技術の復元作業から見えること (依田香桃美)	297
〔37〕 古代の分業と復元研究過程の分業について (押元信幸)	310
〔38〕 復元研究プロジェクトチームの運営について (鈴木 勉)	312
〔39〕 復元研究を終えて (押元信幸)	318
〔40〕 まほろんの復元展示 (鈴木 勉)	321
〔41〕 あとがき (森 幸彦)	324

### ≡文化財報告≡

一里段 A 遺跡の工事中立会に係る記録報告 (今野 徹・伊藤典子)	329
法正尻遺跡65号住居跡の縄文土器 (松本 茂)	341
文化財データベースについて	
ーその 1 基本構造と遺跡データベースについてー (藤谷 誠)	345

≡研究論考≡

## 福島県内出土古墳時代金工遺物の研究

一 茨内古墳群出土馬具・武具・装身具等、

真野古墳群 A 地区 20 号墳出土金銅製双魚佩の研究復元製作一

### 復元研究プロジェクトチーム

工芸文化研究所	鈴木 勉
松林彫刻所	松林 正徳
黒川彫刻	黒川 浩
工芸作家	小西 一郎
Lemi's Metalwork Studio	依田香桃美
東京芸術大学美術学部	長谷川克義
東京芸術大学美術学部	押元 信幸
東京芸術大学美術学部	山田 琢
ambi ARTJEWELLERY&CRAFTS	高橋 正樹
鍛金作家	伊藤 哲恵
文化財と技術の研究会	五味 聖
東京国立博物館	古谷 毅
筑波大学歴史・人類学系	桃崎 祐輔
宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室	清喜 裕二
福島県立博物館	菊地 芳朗
福島県文化財センター白河館	森 幸彦
(財)元興寺文化財研究所 保存科学センター	菅井 裕子 渡辺智恵美
東京国立文化財研究所 保存科学部	平尾 良光 榎本 淳子 早川 泰弘

## [41] あとがき

森 幸彦

福島県文化財センター白河館における研究活動の第一歩として、紀要の冒頭に本論考を掲載することができた。有職故実に用いられる用語や考古学的専門用語、金工をはじめとするさまざまな技術者専門用語などが飛び交っている紙面を読み解いていくのは、少々努力が必要かも知れない。しかしながら、地中から掘り出されたひとつの文化財が、なんと多くの情報を私たちにもたらしてくれているか、そして研究復元を通して知り得たことがなんと多いことか、という面については強く感じていただけたものと思う。

桃崎、古谷、清喜、菊地各氏には、筑内古墳群の出土資料について、考古学的考察に拠った上で復元案を示してもらった。筑内古墳群の再評価という点でも意義ある論集といえよう。桃崎氏には、詳細な資料を基に37号横穴墓出土馬具の製作年代を聖徳太子存命期の7世紀第1四半期であるという編年観を示してもらい、仏教意匠の転移から止利仏師工房と関連する技術集団によって製作されたと推定するなど、馬具の具体的位置付けをしていただいた。古谷、清喜、菊地各氏には、鞍や鐙、刀装、矢など、腐蝕して無くなってしまったであろう有機質の部分について、他遺跡の事例を総合的に解釈した上で妥当性の高い案を提示していただいた。全ての証拠が揃っているとは限らない遺物の復元にあっては、この総合的解釈が不可欠であり、バックデータの正確さによって復元の正確さも左右されると言える。

これらの復元案から製作に移行する間、考古学研究者と製作者の間で侃々諤々の議論をしたことは、メンバー各々にとって極めて有意義であったと振り返る。考古学的推察が製作技術の面から否定されることがままあったし、逆に現代の製作技術では考えられない事実に直面し、資料第一義とする考古学研究者側の主張を貫いたということもあった。両者が相容れないということは決して無く、このような場面では資料そのものが答えを導いてくれた。どちらが正しいというのではなく、歴史の実像に迫るには、どちらからのアプローチも欠かせないということを実感した。

製作に当たっては、まず、遺物の復元を通してどんな情報を得ていくのかという、鈴木氏による課題の設定が重要である。「復元」とはいつても、全ての素材や道具まで古代に忠実であることは不可能である。よって重要な視点は道具よりも技術の復元に置かれる。その課題に応えるべく、9名の製作集団が文字通り試行錯誤を重ねながらこの復元に挑んでくれた。頭が下がる思いである。技術を文字で表現するのは難しく、ここでは試行錯誤の全容を盛り込むことはできなかったであろう。しかし、それぞれの論考ごとに、全霊を注ぎ込んだ復元によってしか得られない確かな古代工芸技術の一端が解き明かされたと言えよう。

資料の化学分析については反省すべき点がある。予算と時間の都合から、復元製作に必要な十分かつ徹底した分析を全ての資料を対象に成し得なかった点である。そのような制限の中で、平尾氏をはじめとする東京国立文化財研究所（現独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所）

の方々(財)元興寺文化財研究所の方々には、分析結果から素材や製作技法について論及していただいた。

今後は、これらの技術が多くの遺物の中で、どのように取り入れられ、どのように変遷し、画期はどこにあるのか、という「技術の編年」が必要である。それには多くの資料を「製作技術」という観点から見ていかねばならず、そこにはやはり「研究復元」という作業が必要になる。復元を通して想定された製作技術が全て事実とは限らない。あくまで事実に近いと思われる技術を、合理的に推測したに過ぎない。しかし、多くの復元作業と多くの事例を比較検討することで、これまで語られなかった明瞭な歴史像が自ずと浮かび上がってくるのではないかとと思われる。

平成11年度に、この古墳時代金工遺物の研究復元プロジェクトを立ち上げた。平成12年度には、宮城県築館町伊治城跡から出土した「弩」の発射装置を基に弩を作り上げて軍団関係の展示資料とするとともに、一方で同範鏡の製作技法を課題として会津若松市会津大塚山古墳出土三角縁神獸鏡の復元を試みた。更に平成13年度には、県内から出土した古墳時代の象嵌資料の復元に取り組んでいる。今後もこのような研究復元を「まほろん」の研究活動として続け、これらの復元過程も本論考に続き報告していく予定である。

現代に残された文化財を調査・研究することによって福島地域の歴史を解明していく施設である福島県文化財センター、その機能には無形の文化財の調査・研究も含まれる。そして、白河館「まほろん」には、その研究成果を利用者に還元していく役割がある。今回行った、モノである文化財を対象に、復元という研究方法を通して、無形である製作技術保持者と共に研究を行っていくというスタイルは、この施設に相応しい研究活動の形ではないだろうか。今、研究復元の結果として形作られた復元品は、「まほろん」の展示室で利用者にわかりやすい歴史を映し出している。このような複合的研究が、最初の一步を踏み出したこの施設に永く息づいていくことを望みたい。

この研究復元製作を完遂させるに当たっては、吹田市博物館の藤原学氏、檀原考古学研究所の泉森皎氏、千賀久氏、今津節生氏、羽曳野市教育委員会の笠井敏光氏、吉沢則男氏、新潟大学の橋本博文氏、山形県立博物館の阿部明彦氏、多摩動物公園の山本藤生氏、福島市在住の刀匠藤安将平氏、センガケをして下さった富山県高岡市在住の和田任市氏、福島県立博物館の松田隆嗣氏、藤原妃敏氏、田中敏氏らに御指導をいただいた。末筆ながら御礼申し上げます。

そして復元案作成、資料分析、関連資料調査、製作に関わっていただき、詳細なる報告まで執筆いただいた研究復元プロジェクトチームのメンバーそれぞれに心より感謝する次第である。

## 文化財と技術 第2号

2002年5月25日印刷

2002年5月31日発行

編集 森 幸彦・鈴木 勉  
発行 文化財と技術の研究会  
代表 鈴木 勉  
発行所 特定非営利活動法人 工芸文化研究所  
理事長 鈴木 勉  
東京都品川区上大崎 1-9-4 (〒141-0021)  
印刷所 株式会社山川印刷所  
福島市庄野字清水尻 1-10 (〒960-2153)